

ネヘミヤ記5章14－19節 「愛をもって仕える」

1A キリスト者に与えられた権威

1B 遣わされた者

2B キリスト者の自由

3B 召された者

2A 服従にある力

3A 信者の手本

1B 共に生きる権威

2B 恐れおののく権威

3B 行動で示す権威

4B 仕え、与える権威

4A 主からの報い

本文

ネヘミヤ記 5 章を開いてください。先週に引き続き、ネヘミヤの指導するエルサレム城壁再建工事の話を読み進めます。午後は 4 章から 6 章まで、一節ずつ読みます。今朝は、5 章 14 節から 19 節に注目してください。

14 また、私がユダの地の総督として任命された時から、すなわち、アルタシャスタ王の第二十年から第三十二年までの十二年間、私も私の親類も、総督としての手当を受けなかった。15 私の前任の総督たちは民の負担を重くし、民から、パンとぶどう酒のために取り立て、そのうえ、銀四十シケルを取った。しかも、彼らに仕える若い者たちは民にいばりちらした。しかし、私は神を恐れて、そのようなことはしなかった。16 また、私はこの城壁の工事に専念し、私たちは農地を買わなかった。私に仕える若い者たちはみな、工事に集まっていた。17 ユダヤ人の代表者たち百五十人と、私たちの回りの国々から来る者が、私の食卓についていた。18 それで、一日に牛一頭、えり抜き羊六頭が料理され、私のためには鶏が料理された。それに、十日ごとに、あらゆる種類のぶどう酒をたくさん用意した。それでも私は、この民に重い労役がかかっていたので、総督としての手当を要求しなかった。19 私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。

私たちは前回、城壁の工事がはかどっている時に、周辺の地方官僚が嫌がらせをし、工事をやめさせようとした話を読みました。けれども、ネヘミヤたちは武器を持ち、警護をしながら工事を進めます。けれども5章は、内部からの問題です。私たちはネヘミヤ記で、「神の民の守り固め」を学んでいます。神がなされる事柄には必ず反対があり、悪魔と悪霊どもが、嘲りや落胆、恐れなどを植えつけて、何とかして私たちが前に進むのをやめさせようとしていることを見ました。けれども、

それは外部からの攻撃です。

今度は内部からの反対であります。これを一言でいうならば、「自分を求める」ことでもあります。ユダヤ人たちの中で貧しい人たちが激しい声を上げました。家族を食べさせる食糧がありませんでした。自分の土地や家を抵当に入れたものもあります。最悪は、自分の息子や娘を奴隷として身売りさせなければいけないような状況になっています。そこで問題は、そこで金貸しをしていたり、奴隷として異邦人にそのユダヤ人を売っていたのは、なっ、なんと同胞のユダヤ人だったのです。貧しい人々を助けるのではなく、むしろその窮状に便乗して、商売をしていた者たちがいたのです。このように、自分自身を求めていた者たちがいたために、ユダヤ人共同体は内部崩壊の危機に立たされていました。

主は、私たちに何か良い働きを行われる時に、必ず私たちに一致を保つように命じておられます。私たちの間に同じ思いを与えられ、御霊の一致によって、それぞれの分をしっかりと果たすことによって、神の御業が前進します。その一致を壊すのは、「自分」であります。キリストではなく、自分を求める時に分裂が起こり、キリストの体が傷を受けます。パウロが、不一致のあるピリピの教会に対して、このように勧めました。「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。(2:2-5)」私たちは何も行っていない時は、表面的には問題がないように見えますが、主が私たちを通して何かを行われようとする時に、自分自身を求めるその利己心が露わにされます。そこで、私たちは自分のありのままの姿を認め、悔い改め、改めて主の命令に従うのです。

ネヘミヤは、その問題を起こしている代表者らに問題をはっきりと話し、貸すのではなく、むしろ負債を帳消しにし、利子も返済するよう強く促しました。そして彼らは同意したのです。そしてネヘミヤは、噴出したこの問題への対処のためだけでなく、自分がエルサレムにいた間にどのような姿勢で金銭を取り扱っていったのかを話しています。

彼が総督であったということに注目してください。14 節に、「ユダの地の総督として任命された」とあります。ペルシヤの各地方において、総督にまさる権限は与えられていません。ネヘミヤは、ユダの地において王からの権限をすべて任されていました。ネヘミヤには、権力があり、権威があり、位があり、そして富もありました。しかし、彼はその権限を城壁の工事のためにすべて用い、具体的にはユダヤ人が工事をするために負担を軽減するところに用いたのです。

1A キリスト者に与えられた権威

このネヘミヤに与えられた権限から、私たちキリスト者に与えられている権限について考えてみ

たいと思います。キリストを信じるという決断をした時に、神は力また特権を与えられます。使徒ヨハネが言いました。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ 1:12)」私たちは、その付与された権威を用いて神のお仕えします。

1B 遣わされた者

イエス様に遣わされた者がどのような力を持っているか、ご紹介したいと思います。イエス様は、ご自分が復活されてから、弟子たちが戸を閉めて集まっているところに来られました。そして、こう言われました。「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。…聖霊を受けなさい。あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。(ヨハネ 20:21-23)」

とてつもない力ですね。神のみが罪を赦す権威を持っています。しかし、イエス様は弟子たちに罪を赦す力を任されたのです。これは、私たちが自分の赦したいと思っている人を赦し、赦さないと思っている人を赦さないという意味ではありません。イエスが語られたように、聖書が語っているように、人をキリストに導き、イエスを自分の主として告白した者に対して、御言葉の権威によって、またイエスの御名によって、「あなたの罪は赦されたのです。」と宣言することができるのです。そして、宣言しなければならないのです。あやふやにするのではなく、神の仕え人となった者たちが宣言することによって、その人に罪の赦しという真理が現実のものとなります。

2B キリスト者の自由

私たちは、キリストによってこのような権限が与えられており、自由を持っています。律法という規則に縛られていません。使徒パウロがこう言いました。「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。(ガラテヤ 5:13)」私たちは神に召されて、「これをしなければいけない。あれをしなければいけない。」という律法また規則から解放されました。そして、私たちが唯一、自分たちを駆り立て、自分たちを動かす動機があります。それは「愛」です。イエス様を愛し、そして隣人を愛する、その愛のみによって動きます。それは、自分を地面に降ろし、イエス様にあって相手のことだけを思う愛です。仕え、また与える愛です。

3B 召された者

先日、ある方から質問がありました。「教会と、その他のキリスト者の集会との違いは何なのでしょうか？」というものです。聖書の学びを中心にした集まりもあり、賛美集会のようなものもありますが、教会ではありません。もちろん、二人、三人が集まり、イエス様の名によって祈れば、イエス様はそこにいて、祈りを聞いてくださいますが、それが教会ではありません。

その違いは、ただ一点に付きます。「キリストに立てられ、神に召されているかどうか」であります。

先ほどから引用している御言葉に、「遣わす」「召す」という言葉があります。自分たちが自主的に集まるのでは人の権威になりますが、神に集められたのであれば、神の権威になります。自分たちが良かれと思って集まる場所には、自分の力がそこに留まっていますが、神がこうするとお決めになったところに呼ばれて、その召集に応えたのであれば、そこには神の霊の力があります。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。(ヨハネ 15:16)」自分で選んだのではなく、イエス様が選ばれたのです。そして自己推薦ではなく、イエス様が任命されました。

ですから、自分がキリスト者として召されているという確信と意識が必要です。教会は選ぶところではなく、イエス様の呼びかけによって集められ、それに応答した者たちが集まる場所です。そのような祈りを捧げてください。まず、私とその祈りが絶対に必要でした。教会のことをパウロが語った時に、「キリストご自身が・・・ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。(エペソ 4:11)」と言ったとおりです。自分はこの教会のここが良い、悪いという選り好みによって来ているのであれば、そこにあるのは「自分」であります。たとえ教会に欠けたところがあるように見えても、自分の好みには合わないようなことがあっても、この教会は神がお立てになったのです。ですから、「この教会にイエス様が自分を導いたのだ」という召しがあれば、そこには神がおられます。神が責任を取ってくださいます。神が、御霊の賜物、御霊の力を付与してくださいます。

2A 服従にある力

キリスト者として与えられている権威ですが、権威というものはすべて神から来ています。「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」ですから、権威や力という言葉を書くときは、いつも「服従」という言葉を思い浮かべなければいけません。服従なしの権威というのは存在しないからです。服従を知らない人は、権威そのものを知ることができません。イエス様ご自身が、権威に服された方です。「キリストのかしらは神です。(1コリント 11:3)」ですから、イエス様は、ユダヤ人たちにこう言われました。「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。(ヨハネ 5:19)」私たちは自分の権利を主張し、権威に対して反発心が出てきます。服従することは、自分の力が失われると感じます。いいえ、反対です。服従するから、自分に力が付与されるのです。服従にこそ権限が与えられるのです。例えば、妻であれば夫に従えば、夫の権威が付与されます。夫はキリストに従えば、キリストの権威が付与されます。

3A 信者の手本

そこで王から一切の権限が与えられている総督ネヘミヤが、どのようにその力を用いたかを見ましょう。

1B 共に生きる権威

14 節を見てください。「また、私がユダの地の総督として任命された時から、すなわち、アルタシヤスタ王の第二十年から第三十二年までの十二年間、私も私の親類も、総督としての手当を受けなかった。」総督としての手当を受けませんでした。そして大事なものは親類も受けていません。しばしば政治指導者の中で、その家族や親族で汚職があったという事件が起こりますね。ですから、ネヘミヤは本人だけでなく親類にさえも、当然受けるべき給与を受けないようにさせました。

ネヘミヤがなぜ、そのようなことをしたのか？それは、人々と一体になるためです。自分の持っている権限を、一般の民と一体になるために用いました。城壁の工事をしている彼らと、その経済的地位においても一つになることによって、神の業が滞りなく勧められるように注意を払ったのです。そのことによって、ネヘミヤに与えられた神の御力を彼らにも分かち合うことができ、ネヘミヤを通して神の力が共有できるようになります。

イエス様ご自身がそのような方でした。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。(ピリピ 2:6-7)」イエス様が、神としての御姿に固執しなかったから、だから人である私たちと一体となることができ、そして私たちが神の御力とその富を受けることができます。使徒ヨハネも、パトモス島に流刑されていた時に、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、(黙示 1:9)」と言いました。師匠ではなく兄弟になったから、そして共にイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかったから、諸教会はイエスの中で動いていくことができました。

私たちが海外で宣教の働きをしていた時に、通う教会は二種類ありました。外国人用の教会と、現地の人たちのための教会です。私たちはどちらも、現地の人たちの教会に通いたいと思いました。そして現地の言葉を学び、現地の教会の人たちと交わり、その後で、そこにいる人たちに聖書を教えるなど、神に仕えることができました。私たちは英語が話せますから、英語礼拝に通うこともできましたが、その能力を敢えて用いないで自分たちを現地の人たちと一つにしていたのです。そうするからこそ、人々がキリストを知ることができるわけです。ネヘミヤは、自分のもっている当然の権利を捨てて、仕えていく人々と一つになりました。

2B 恐れおののく権威

次、15 節を見てください。「私の前任の総督たちは民の負担を重くし、民から、パンとぶどう酒のために取り立て、そのうえ、銀四十シケルを取った。しかも、彼らに仕える若い者たちは民にいはりちらした。しかし、私は神を恐れて、そのようなことはしなかった。」ネヘミヤは、前任の総督たちのように、自分たちの食べるもののために税を課すこともできました。しかし、それは民がさらに苦しめられることを意味します。しかしネヘミヤは、「神を恐れて」そのようなことはしなかった、とあります。

ですから、ネヘミヤは神を畏れかしんで權威を用いました。自分が人々を裁く権限が与えられているけれども、神がその人々に対して行っていることにしたがって自分自身を裁く権限があることを知っていたので、控えたのです。そこに知恵があります。「主を恐れることは知恵の初め(箴言 9:10)」とあります。この前、ある方から、自分が苦しみの中にいる時に、周囲の人が、「こうすればいいじゃない」「ああすればいいじゃない」という助言を軽々しく与えるのに腹が立ち、がっかりすることを話しておられました。私は、「牧師でさえ、そんなことは言えないよ。祈って、祈って、そして神から知恵が与えられないと。」と答えました。権限が与えられているからこそ、神を恐れて控えるのです。

聖書ではそれを「慎み」と言います。「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。(2テモテ 1:7)」力には愛があり、ゆえに慎みもあります。あることを行なう力もあり、その自由もあるのです。それは、なんら神に対して罪になりません。しかし、そのことで愛する兄弟がつまずくのであれば、それを敢えて行いません。兄弟をつまずかせてしまう、というところに神への恐れが生じて、慎みが生まれるのです。

3B 行動で示す權威

そして 16 節を見ましょう。「また、私はこの城壁の工事に専念し、私たちは農地を買わなかった。私に仕える若い者たちはみな、工事に集まっていた。」ネヘミヤは総督ですから、土地の一区画ぐらい買いたいものです。けれども、自分に仕える若い者たちが工事をしているのだから、城壁の工事に専念しました。つまり、自分の權威を「行動」で示しました。「私の言うことを行ないなさい。」ではなく、「私の行なうことを、行いなさい。」と示したのです。

しばしば、私たちは、「私たちを見るのではなく、イエス様を見て。」ということを行います。確かにその通りです。人を見ていればつまずきます。希望はイエス様だけにあります。しかし、これを自分自身が使うと、どこかで逃げているな、と思うのです。正しいことを語るだけ語って、実際にそれを見せていないのです。使徒たちは違いました。ペテロとヨハネは、足なえの男に大胆にも、「私たちを見なさい。」と言いました。そして、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。(使徒 3:6)」と言いました。使徒パウロも言いました。「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。(1コリント 11:1)」

やはり、イエス様に倣うのです。そしてイエス様に倣っている自分の姿を見せて、それで他の人がイエス様に倣うことができるようにするのです。

4B 仕え、与える權威

そして 17-18 節です。「ユダヤ人の代表者たち百五十人と、私たちの回りの国々から来る者が、私の食卓についていた。それで、一日に牛一頭、えり抜き羊六頭が料理され、私のためには鶏が料理された。それに、十日ごとに、あらゆる種類のぶどう酒をたくさん用意した。それでも私は、

この民に重い労役がかかっていたので、総督としての手当を要求しなかった。」総督ですから、ユダヤ人たちの代表者だけでなく、周りの国々の人々も来ます。そして食事を出すのですが、それはそれは、盛大なものでした。牛一頭、羊六頭が毎日出されます。ぶどう酒も高級なものがずらりと並びます。けれども、総督の手当てを要求しませんでした。

ここにある権威は、「仕えて、与える権威」です。自分の財産からこれらの食費を捻出しました。自分の財布が軽くなるような犠牲を払いました。しかし、民の重い労役にさらに重荷を負わせたくないと思い、自分で担ったのです。イエス様ご自身は、ご自分の命をも捧げるほどの奉仕をされました。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。(マルコ 10:45)」

弱い人の弱さを担い、犠牲を払うところに愛の究極の姿が現れています。「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。」と書いてあるとおりです。(ローマ 15:1-3)」主は、罪の負い目を持っている人々のために、その罪をご自身の上に担われました。私たちは、自分自身が犠牲を払っていることが人の目に付かなくても、主が見ておられることを知っているので主張することなく、満足できるのです。

4A 主からの報い

そして、最後が大事です。これらの良い行いをしたネヘミヤは、主に対して報いを求めていることです。19 節を見てください。「私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。」人に対して行っているのですが、究極的には主に対して行っています。そして、主からの報いを期待することによって、人と人の関係ではなく、主と自分との関係になります。「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタイ 6:3-4)」

いかがでしょうか、ぜひ奉仕の働きに整えられた、良き働き人になってください。自分のものを捨てて、あるいは無にして、仕える人と一体になってください。神を恐れて、慎み深い考え方をしてください。行動で示して、模範になってください。そして与え、仕えてください。主があなたを選ばれました。主が立たせてくださっています。その大きな権限を愛をもって仕えることによって十分に用いてください。皆さんは、すばらしい神の人になれるでしょう。良き働き人になれるでしょう。